NAGASAKI
じんけん歴史散歩

長崎 Ⓐコース

# 長崎の部落史を歩く

NPO法人 長崎人権研究所

# 発刊によせて

ふと気付いたことがあった。それは、時間が歩けるということだ。

この数年、被差別部落の移転を巡るフィールドワーク研修の依頼が多い。

長崎のまちづくり、キリシタン迫害、中国・オランダとの貿易、そして、

原爆の惨禍、長崎の顔が一つ一つ部落の歴史に重なる。

紙上の歴史では味気ない。歩くことによって、確かさが見えてくる。

人びとがどのように暮らしていたのかを想像することができる。

「時間を歩く」には、見る・聞く・感じる営みがすべて含まれている。

あ

フィールドワーク **時間を歩く**

## 長崎の部落史を歩く　目次


①崇福寺、唐人屋敷(コラム)……2～3

②大音寺・皓台寺、オランダおいね(コラム)……4～5

③幣振坂・ししとき(鹿解)川……6～7

スポット①「町づくり」……8

スポット②「寛永頃の長崎の地図」……9

④サン・フランシスコ教会跡、桜町牢(コラム)……10～11

⑤サント・ドミンゴ教会跡、「皮屋」の偉業(コラム)……12～13

⑥長崎会所跡、被差別民を指す名称の変遷(コラム)……14～15

⑦筑後町通り……16～17

⑧サン・ラザロ病院跡、ハンセン病とキリスト教(コラム)……18～19

⑨26聖人殉教地……20～21

スポット③「被差別部落の二度にわたる移転」……22

スポット④「日本初の解剖実習の地」……23

⑩中馬込小学校、教員履歴(コラム)……24～25

⑪聖徳寺、皮屋町からの進物(コラム)……26～27

スポット⑤「浦上四番崩れ」……28

スポット⑥「キリシタンと部落問題」……29

⑫浦上青年会館跡、部落改善運動(コラム)……30～31

⑬涙痕の碑、「艦船売込組合」の銘(コラム)……32～33

主要参考文献一覧、奥付……34

# フィールドワーク
# ～長崎の部落史を歩く～

崇福寺→大音寺・皓台寺→ししとき川→眼鏡橋（中島川）→
長崎市役所別館→サント・ドミンゴ教会跡資料館（桜町小学校）→
筑後町通り→聖福寺→本蓮寺→26聖人殉教地→浦上街道→
浦上青年会館跡→涙痕の碑

# 1 崇福寺

所在地：長崎市鍛冶屋町

**歴史発見**

## 唐人屋敷

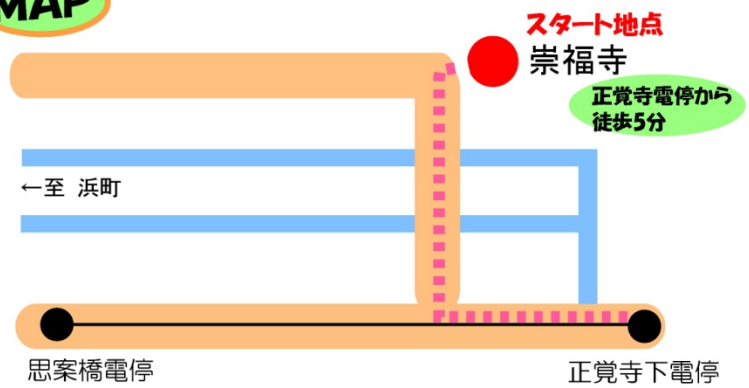
貿易等で長崎に来た中国人は、当初市中の町々に住んでいた。宿町・付町制度のもと中国船の船宿になると貿易の利益が配分されるため、内町・外町の順番を決めて船宿を割り当てることにした。ところが、キリスト教禁教政策や密貿易（抜け荷）が横行することから、１６８９年（元禄２）長崎市南部の十善寺郷（現在の館内町）に唐人屋敷を造営した。総面積３万6,１８７平方メートル、収容人員は2,０００人とされるが、4,０００人が住んだこともある。ここにおいて、出島のオランダ人そして唐人屋敷の中国人を囲い込む体制が整ったのである。ただ、唐人屋敷は比較的出入りが自由であったという。また、１７０２年（元禄15）唐人屋敷の海岸端に「新地蔵所」が造成された。これは元禄の大火で唐船２０艘分の貿易品が消失したためであった。



「崇福寺」は、１６２０年（元和６）の泉州等出身者による福済寺、１６２８年（寛永５）の南京出身者による興福寺の創建に続いて、１６２９年（寛永６）、長崎で貿易を行っていた福建省出身の華僑の人々が、福州から中国僧超然を招いて創建した黄檗宗の寺院であり、興福寺、福済寺とともに三福寺といわれる。中国様式の寺院としては、日本最古であり、大雄宝殿、第一峰門は国宝に指定されている。

これら寺院の創建の頃は、キリシタンに対する弾圧も厳しさを極め、１６２８年（寛永５）には長崎奉行水野守信が考案した踏み絵も始まり、１６２９年（寛永６）には、さらに過酷なキリシタン弾圧を行った竹中重義が長崎奉行に就任している。このため、１６８９年（元禄２）に唐人屋敷ができるまで中国人は市中に住んでいたこともあり、キリシタンでない証明が必要となった。出身地域ごとの唐寺の創建には、こうした背景がある。１６３７年（寛永１４）の島原の乱後には、寺院が檀家であること（キリシタンでないこと）を証明する寺請制度もはじまり、全ての人々はどこかの寺院に所属することになる。

**MAP**



# ② 大音寺・皓台寺

犯科帳所載被処刑者之霊（大音寺）　所在地：長崎市鍛冶屋町

## 歴史発見

### オランダおいね

楠本イネは１８２７年（文政１０）、オランダ商館医シーボルトと丸山町遊女お滝（其扇）の間に生まれる。翌年、禁止されている日本地図等を国外持ち出しが発覚した「シーボルト事件」が起こり、シーボルトは国外追放となった。イネはシーボルト門下の宇和島藩二宮敬作や備前岡山の石井宗謙から医科・産科を学び、村田蔵六（後の大村益次郎）からオランダ語、ポンペからも産科医術を修業した。また、日蘭修好通商条約（１８５８年）の翌年再来日したシーボルトからも西洋医学を学んだ。１８７１年（明治４）東京で開業した後、宮内省御用掛となる。１８７５年（明治８）長崎に帰郷し産院を開業。その後再上京、７７歳で亡くなる。日本最初の産科女医である。大音寺境内には、母お滝とともに墓所がある。



「大音寺」（浄土宗）は、１６１４年（慶長19）に伝誉関徹の開山により創建された。１６２０年（元和５）にはキリシタンから仏教への転宗に功があったとして幕府より本博多町にあったミゼリコルデイア（キリスト教の福祉施設）の跡を与えられた。１６３８年（寛永15）現在地に移転し、１６４８年（慶安元）には寺域を拡大した。

「皓台寺」（曹洞宗）は、１６０８年（慶長13）に亀翁良鶴によって創建された。１６２６年（寛永３）に現在地に移転。１６４８年（慶安元）に寺域を拡大して、朱印地（免租地）となった。

両寺は、本蓮寺（日蓮宗）とともにその格式は高く、長崎の仏教界の中心として、キリシタン対策の面でも大きな役割を果たした。ところで『大音寺私記』には、両寺の寺域拡大にあたって「住職が奉行所から命令されたことは、北平・皮屋で（一行欠字）を追い立てて、馬込に移転させる。また、皮屋は大音寺に、北平は皓台寺に与える」と記され、皮屋町の人々を追い払って行われたことがわかる。また、アビラ・ヒロンは『日本王国記』で、この皮屋町の人々の生業とおかれた状況を「市外の、最もひどい町はずれにいる鼻高、雪駄、金剛（いずれも裏に牛皮を用いた）などの履物や草履を作る者たち、これらの人々は漁師らよりも低く見られているが、鹿皮をなめす連中も、彼らと一緒に住んでいる。しかも鹿やかもしか革で足袋や手袋や袴を作る職人は尊ばれている。」と紹介している。

写真は大音寺境内に置かれている石碑で、背面には施行年と施工者の名（森永種夫等）が刻まれている。長崎奉行所の判決記録である「犯科帳」の翻刻を記念して建てられたもので、江戸時代長崎で処刑された人は１，０００人にのぼるとされている。「犯科帳」は、当時の庶民生活を伝える重要な記録で被差別部落である「皮屋町」や非人集落にすむ人々も登場し、その姿を浮き彫りにしている。

# 3 幣振坂・ししとき川

へいふりざか　　鹿　解

幣振坂

ししとき川
鹿　解

「へいふり坂」は、先に紹介した大音寺と皓台寺の間にある坂である。坂を登り詰めると風頭公園にいたる。

１６３０年代に描かれたとされる『寛永長崎港図』（長崎歴史文化博物館所蔵）にも「かわた町」（のち皮屋町）が記載されており、１６４８年（慶安元）の移転までこの坂上にあった。なお、「かわた町」は、輸入牛皮を加工する職人町として長崎の町づくりの中で形成され、長崎の被差別部落の原型となった。

「ししとき川」の上流には毛皮屋町（のちの新橋町）があり、鹿皮の革製品が作られていた。「ししとき」とは「鹿解」のことで、鹿の解体も行われたと思われる。鹿皮は江戸時代を通じて牛皮を扱った皮屋町の人々と違い、町人が扱っていた。新橋町の「くんち」の傘鉾には鹿が飾られており、職人町としての歴史がうかがえる。なお、石でふいた川底は、幕末期に水が溜まらないように伝染病対策として建設された。

**歴史発見**

## 長崎貿易と被差別民

江戸時代長崎には、中国やオランダ両国によって、生糸・織物・薬種・荒物など、多くの品々が輸入された。鹿皮・牛皮・鮫皮等の皮革類も多く輸入され、山脇悌二郎は『長崎の唐人貿易』において、「ハルシャ（ペルシャ）皮も多い。これは着色した牛の皮であったらしく、馬具に用いられている。す（素）皮で輸入された牛の皮も少なくない。これは中間品であって、丹殻（紅樹皮ともいう）でなめしていたらしく、長崎と大坂のかわたは、これを専業にしていたものであった。１６４１年（寛永18）、船艘が輸入した皮革は５０,２５０枚（鹿皮４１,５５０枚）であり、１７１１年（正徳元）には８５,８２１枚（鹿皮６０,１６０枚）であった」としている。古記録に、大坂渡辺村（被差別部落）には元和元年（１６１５年）頃１２軒の「和漢皮問屋」があったとされ、「年々長崎表へ諸革類入札買い取りにまかり越し」とある。

# スポット①

## 町づくり・貿易・キリシタン・被差別部落

長崎は、１５７１年（元亀２）イエズス会の布教とポルトガルの対日貿易地として開港された。フランシスコ・ザビエルが１５５０年（天文19）平戸を訪問して以来、貿易は平戸を窓口としたが、キリスト教の布教と貿易をするために最適な地を求めて、横瀬浦、福田、口之津と窓口を換えた。１５６８年（永禄11）トードス・オス・サントス教会（現：春徳寺）が建てられた後、長崎には、当初島原・平戸・大村・横瀬浦等六ヵ町が造られ、各地からキリシタンが集まった。１５８０年（天正８）大村純忠は、貿易の利を得るために交通の要所茂木とともに長崎をイエズス会に寄進した。１５８７年（天正15）豊臣秀吉は、バテレン追放令を出し、教会領であった長崎を没収、直轄領とし、長崎奉行（唐津城主寺沢広高）が置かれた。長崎には、博多や豊後の貿易商人が集まり内町と呼ばれる２３町が造られた。本博多町、豊後町、興善町等である。さらに外町には職人町が造られた。中島川沿岸には、材木町、本紺屋町、袋町、酒屋町、魚町、本大工町、桶屋町等々仕事に由来する町名が多い。長崎は寛文期（１６７０年頃）には８０ヵ町となった。

皮屋町（かわた町）は職人町の一角に見られ、寺町通りに面する幣振（ぬいぶり）坂上にあり（「寛永頃の長崎の地図」参照）、アビラ・ヒロンは履物を造り、鹿皮鞣（なめ）しを行う町であるとしている（『日本王国記』）。長崎は、「鎖国」以降、中国・オランダとの貿易で成り立っている町であり、皮屋町の人々もまた、その恩恵にあずかっていた。中国や東南アジアから輸入される牛皮や鹿皮は莫大な量に上り、一部は長崎に下ろされ、加工された後、雪駄等の履物に生まれ変わった。また、皮屋町住民もキリシタンであった。禁教令以降も長崎に潜伏した宣教師が、マニラに送った手紙には、１６２１年（元和７）の大殉教を前後して、住民が弾圧に抗する姿が伝えられている。



# スポット②

## 寛永頃の長崎の地図

佐久間正・他訳『大航海時代叢書ＸＩ』
（アビラ・ヒロン「日本王国記」記載に一部加筆）

# 4 サン・フランシスコ教会跡

歴史発見

## 桜町牢 高木仙右衛門の「覚書」
### ～浦上四番崩れ事件～

またその日に御用があり、連れられて行く途中で、皮屋町の者たちが私に「お前一人のために、夜も寝られず、また難儀なことになる。だから改心しろ」と言いました。私は「改心することはできません。私も疲れているので最後が近いので、それまでの間お世話して下され」と申しました。（略）浦上のキリシタンは皆頼もしい心を失っていました。それはキリシタンのうち重だった者６０人余りが改心して帰ってきたからでした。また改心して帰ったものは、天主に背いて帰ってきたので、その人を愛する者は一人もありません。妻もこれまでの妻のようではなく、子どもも子どものようでない。飯を食べよと言う人もいません。まことに改心してわが家に帰ったものは、見るに見られぬあわれな有様でした。お役人と皮屋町の者どもからはきびしい責めにあい、妻や子どもからは捨てられたようになって、身の置きどころもなく床の下や畑や山などに隠れておりました。

引用：高木慶子『高木仙右衛門覚書の研究』（中央出版社、1993年）



「サン・フランシスコ教会」は、１６１１年（慶長16）にクルス町（現在の桜町）にペドロ・デ・ラ・アスンシオン神父によって付属の修道院とともに建設が始まり、フランシスコ会の本部となったが、１６１４年（慶長19）に完成を見ずに破壊された。

フランシスコ会は、１５９２年（文禄元）から日本布教を始めたが、１５８７年（天正15）の豊臣秀吉の伴天連追放令以来イエズス会の布教が行き詰まったことに対して、これにかわる使命感もあったといわれる。しかし、このことがキリシタン禁教に対して挑戦的であると受け止められ、１５９７年（慶長元）の「二十六聖人の殉教」という悲劇を生む。布教にあたっては、ハンセン病の病院を設けたり、貧民救済にも力を注いだ。

教会破壊後は、「クルス町の牢屋」と呼ばれ皮屋町の人々も牢番をつとめた。のちに「桜町牢」と呼ばれるようになり、多くのキリシタンも投獄され、西坂で処刑された。

幕末の１８６５年（慶応元）に潜伏キリシタンが発覚し男女６８名がこの牢に収容された。明治になって浦上村のキリシタンが西日本各地に総流配となる「浦上四番崩れ」のきっかけとなった。

### ✚歴史発見ー長崎にあった教会と、その後

①サンパウロ教会　イエズス会本部跡
　サンタ・マリア教会（被昇天の聖母の教会）→長崎奉行所（西役所）
②ミゼリコルディア（福祉施設）　→大音寺（後、移転）
③山のサンタ・マリア教会　→長崎奉行所（立山役所）
④サント・ドミンゴ教会　→長崎代官所
⑤サン・ラザロ病院・サン・ジョアン・バプチスタ教会　→本蓮寺
⑥サン・フランシスコ教会　→桜町牢
⑦サンチャゴ教会・病院（酒屋町）
⑧サンタ・クララ教会（家野町）
⑨サン・アントニオ教会（本大工町）
⑩サン・アウグスチノ教会（本古川町）
⑪サン・ペドロ教会（今町）
⑫サン・ロレンソ教会（高麗町）
⑬サン・ミゲル教会（炉粕町）
⑭トードス・オス・サントス教会　→春徳寺
⑮ラザロ病院（浦上）　→山王神社

# 5 サント・ドミンゴ教会跡

所在地：長崎市勝山町(桜町小学校)

歴史発見

## 「皮屋」の偉業

ドミニコ会の宣教師ハシント・サルバネスは１６２０年（元和６）、長崎に潜伏中マニラの管区帳代理にあてた手紙で、「獣類の皮をはぐことを職業としている皮屋」の偉業を伝えている。「この者たちは今から二年前１２人の聖殉教者が焼かれた時と同じように今回も、罪であることを知っているので、処刑の仕事に出て行こうとしませんでした」と。また代官（末次）平蔵が、この仕事をしないならお前たちは死ななければならぬ、と脅したことに「死ぬ覚悟をしています」と答え、「この人々は日本で最もさげすまされている貧しい人々ですから、聖殉教者フライ・エルナンド・デ・サン・ヨセフ及びフライ・アロンソ・デ・ナバレーテ両名は彼らに施しを与え、ミサを捧げ秘蹟を授けて彼らを援け、そのために小さな礼拝所を造りました」と続けている。ここに記される二人の宣教師は、いずれも１６１７年、大村湾に浮かぶ鷹島で処刑されている。アロンソは、ドミニコ会の宣教師である。



「サント・ドミンゴ教会」は、１６０９年（慶長14）にドミニコ会のフランシスコ・デ・モラーレス神父によって建てられた。神父は、１６０２年（慶長７）以来薩摩で宣教活動を行ってきたが、迫害がはじまると薩摩を追放された。その際、京泊（鹿児島県薩摩川内市）にあった「ロザリオの聖母聖堂」を解体して長崎に運び、移設したのがこの教会である。移設した地は、当時長崎代官で熱心なキリシタンでもあった村山等安がドミニコ会に寄進した土地であった。ドミニコ会は皮屋町の人々やハンセン病者など被差別の人々に布教活動を行い、皮屋町でも多くの人々がキリシタンになった。しかし１６１２年（慶長17）、幕府領に禁教令が出され、１６１４年（慶長19）には、長崎のほとんどの教会や関連施設とともにこの教会も破壊された。

その跡地には長崎代官となった「末次平蔵の代官屋敷」が建てられる。末次平蔵は博多出身の豪商で、朱印船貿易で活躍したが、キリシタンから仏教に転宗したこともあり、また長崎代官としての立場からもキリシタン弾圧に深く関わることになる。

「皮屋の偉業」で記されている「抵抗」の姿は１６１９年の村山徳庵（代官村山等安の子）やレオナルド木村他三人が処刑された時の様子で、１６１８年（元和４）の事件は同じく等安の子で教区司祭のフランシスコ村山の処刑である。村山等安はこの事件で失脚し、末次平蔵が代官となった。こうした報告は、１６２１年（元和７）、１６２２年（元和８）にも行われている。元和８年は、ルイス・フロイス等１５人が処刑され、この時、「この仕事は皮屋のものですが彼らが応じなかったので、娼婦の町に住み働いている異教徒にこれを命じたのです」とある。こうした被差別民のキリスト教受容は、実は長崎のみならず全国的にも足跡がある。「吉利支丹出申国所の覚」（１６５８年）には、江戸や神奈川・鎌倉で「乞食（非人）・えた」の記載がある。また、岡山の美作藩でも「キリシタン類族」が数えられ、米沢・仙台・会津・福島にも記録が残されている。

# 6 長崎会所跡

所在地：長崎歴史文化博物館前

歴史発見

## 被差別民を指す名称の変遷

「かわた（皮田）」「かわや（皮屋）」「えた（穢多）」等の名称は、長崎ではすべて同じ人々を指す。１６０３年長崎で出版された「日葡辞書」には、河原の者＝皮屋＝長吏＝癈ったとし、死んだ馬や牛の皮をはぎ、その皮でさまざまな物（皮籠等）を造る人々であり、らい病人に対して監督権をもっている、としている。「かわた」「かわや」という呼び方は、１６７０年頃、全国的にも「えた（穢多）」という表記に代わる。まさに差別表現が使われ、この時代以降、身形（服装等）や交際において、さまざまな身分規制が行われるようになる。また、「えた（穢多）」という名称が蔑称であることから、今日では西日本で「かわた」、東日本では「長吏」という表現が使われている。

教科書等には、「えた・非人」と両者をセットで使われる場合が多いが、両者は別物であり、全国的に「非人」は、「解放令」の後、集落としては解体している場合が多い。



「長崎会所」は江戸時代に設けられた貿易機関である。

江戸時代初期、最も重要な輸入商品の生糸はポルトガル商人が値段決定を主導し、利益も独占した。このため、堺・京都・長崎の三ヶ所（のちに江戸、大坂が加わり五ヶ所）の特定商人が糸割符仲間をつくり価格決定と一括購入を行い、これを個々の商人に分配した。この仕法が中国やオランダ商人にも適用される。その後、長崎での貿易仕法は変遷をくり返すが、１６７２年(寛文１２)市法売買では五ヶ所商人の目利き(鑑定人)がすべての商品を評価し、決定した価格で取引を行った。利益は市法増銀として諸役人の給与に充てられたり長崎の町に分配された。

１６９８年（元禄１１）、「長崎会所」が設立され、長崎奉行の監督下で貿易を独占し、統轄した。このうち輸入牛皮については、長崎と大坂の「かわた」が一定量を原価で買い取り、残りを五ヶ所商人と「かわた」が入札した。特定の商品を優先的に原価で買い取る仕組みは、砂糖を扱う菓子屋や白糸を扱う織物屋、錫、鮫皮を扱う職人と同様であり、「かわた」が職人として扱われていたことがわかる。「長崎会所」は運上金を幕府に上納しただけでなく、利益を「箇所銀」「かまど銀」として長崎の町に分配したが、その額は年間７万両におよぶ。貿易の利益は出銀ともいい、牛皮出銀は目利きの給与として支出した残りのうち、半分は貧窮した人々の給米代銀とされたが、その一部が橋の修繕など土木事業にも充てられた。

# 7 筑後町通り

聖福寺

じゃがたらお春の碑

筑後町は、江戸時代筑後地方の人が多く居住したことがその名の由来とされている。浄土真宗本願寺派西勝寺には、フェレイラの「きりしたんころび証文」が保存されている。イエズス会司祭クリストファン・フェレイラは、ポルトガル出身で１６０９年（慶長１４）来日し、イエズス会の日本管区長代理を務めていた。１６３３年（寛永１０）長崎で捕縛され、中浦ジュリアン神父等とともに穴吊りの刑を受け、棄教、日本名を沢野忠庵とした。

「ローマ教会に一つの報告がもたらされた」で始まる、遠藤周作の『沈黙』には、フェレイラの転向をどうしても信じられないロドリゴが、日本に潜入し捕縛され西勝寺でフェレイラと会話する場面が描かれている。

―「お前が転ぶよう、奨めろと…私は言われてきた」とフェレイラは言う。通辞は「そのままでは即座に絶命するゆえ、こうな耳のうしろに穴をあけてな、一滴一滴血が滴るようにする。井上様の考えなされた拷問だが」とわざと怯えたように付け足した。―

また、この通りには、黄檗（おうばく）宗寺院聖福寺がある。崇福寺、興福寺、福済寺とともに、唐四ヶ寺とされ、開基は鉄心で、中国の商人と日本人との間に生まれたとされる。境内には「じゃがたらお春」の石碑がある。「お春」はイタリア人航海士と日本人女性の間に生まれ、１６３９年（寛永１６）の第５次鎖国令によって、母や兄弟とともにジャカルタに追放された。石碑の裏には、「長崎の鶯は鳴く　いまもなほ　じゃがたら文の　お春あはれと」（吉井勇）が刻まれている。しかしお春自体は、同じく平戸から追放されたオランダ人男性と結婚、幸せな人生をすごしたとされている。

通りを進むと、真宗大谷派長崎教務所があり、石段は、幣振坂と命名されている。ここには、「非核・非戦の碑」がある。長崎原爆でなくなった人びとの「一万とも二万とも」いわれる遺骨が納骨されている。毎月、９日には追悼法要が営まれる。

# 8 サン＝ラザロ病院跡

所在地：長崎市筑後町

## 歴史発見

### ハンセン病とキリスト教

大村でドミニコ会の宣教師・ベルトランが召し捕られた時、

「らい病者の小屋に捕らわれし夜、その宿主にて親切なるマルタと申す女は、我等のみ縛らるるを見て、自分も共に召し捕らわれよとあせり願ひしも、役人はこれを許さず、マルタは天に向かって、自分をパアデレより離し給はるなと叫びつつ、小子にすがりつき（但し手先はなき故、云はゞ腕にて）、又跡を追ひ（但し足先はなし）来り、人夫がそれを引き離さんとしても聞入れず、且つ天に向って、ラウダアト、ドウミヌム、その他日本語のオラショを色々と唱へ、パアデレ様と離れぬ様にと叫びて已まずかくてその夜を過ごすべき家に行き着きても、そこにはらい病者を容れず、又牢舎に向ひても同伴は許されざりしも、御主（おあるじ）が哀れの願を容れ給ひてや、その事長崎奉行に聞こえ、奉行の命として、此女をも召し捕る事と相成候。此女も、熱心に願ひ居る通り、我等と一緒に火あぶりになる様にと祈り居候。云々」

『アフオン・デ・ルセナの回想録』



長崎の北に位置し、浦上村との境に位置する本蓮寺には、禁教令施行までフランシスコ会のサン・ジョアン・バウチスタ教会と「サン・ラザロ病院」が建てられていた。この教会は、岬の被昇天のマリア教会（のちの長崎奉行所西役所）、トードス・オス・サントス教会（のちの春徳寺）とともに長崎の三大教会といわれた。「サン・ラザロ病院」は「重度の皮膚病患者・ハンセン病患者（当時「癩」と呼ばれた）」を収容し、手当てをした。長崎には、ミゼリコルディア（慈悲の組）と呼ばれた社会福祉の教会が作られ（現在の長崎地方法務局あたり）、カトリック教会は貧しい人々や病気を持つ人、孤児等の救済にあたった。「歴史発見」には、大村でベルトランという宣教師が逮捕された時、ハンセン病であるマルタという女性がともに召し取られたいと嘆願しているが、この当時、当時「らい」とされた人々がキリシタンとして数多く処刑されている。江戸では、１６２３年（元和９）５０人が召し捕えられすべて「らい」者であった、との記録がある。キリスト教弾圧が凄惨を極めたころ、キリシタンは「らい」者の住む村に潜伏したのではないかとされる。大阪では、「垣外（がいと）」という非人集落があり、そこには「類族」が多くみられる。類族とは、キリシタンのまま死亡した者の子孫をさし、彼らは「類族改め」が行われ監視された。このように、「らい」者や非人など差別された集団の中にキリシタンが多数存在した。また大阪では、１６３０年（寛永７）「乞食となり諸方に隠れおりたる」キリシタン７０人がルソンに追放され、この事件で「以後乞食えたどもに宗旨改踏絵させられる」と記録されている。

本蓮寺は、大音寺、皓台寺とともに長崎の三大寺院に数えられ、幕末勝海舟が滞在した。１６９８年（元禄１１）の大火で焼失し、この時、西坂に移転していた「皮屋町」も燃えている。また、長崎原爆の際も全焼している。

## 一口メモ　山王神社（長崎市坂本２丁目６－５６）

本蓮寺にあったサン・ラザロ病院と別に浦上村のイエズス会経営のハンセン病を扱うサン・ラザロ病院があった。２６聖人は刑場へ向かう途中でここの付属教会に立寄って、別れを告げに来たポルトガル人や信者とあい、２人がイエズス会の修道士となって、西坂の処刑場へ向かった。

被爆クスノキ

# ⑨ 26聖人殉教地

所在地：長崎市西坂町

## 26聖人記念碑　名簿　記念碑右からの順番

聖フランシスコ吉 京都、大工、年齢不詳
聖コスメ竹屋　尾張、刀剣師、38歳
聖ペトロ助四郎　京都、年齢不詳
聖ミカエル小崎 伊勢、弓矢師、46歳
聖ディエゴ喜斉 備前、イルマン（イエズス会修道者）、64歳
聖パウロ三木 摂津、イルマン、33歳
聖パウロ茨木 尾張、54歳
聖ヨハネ五島 五島、イルマン、19歳
聖ルドビコ茨木 尾張、12歳
聖アントニオ 長崎、13歳
聖ペトロ・バプチスタ スペイン、司祭、48歳
聖マルチノ・デ・ラ・アセンシオン スペイン、司祭、30歳
聖フィリッポ・デ・ヘスス メキシコ、修道士、24歳
聖ゴンザロ・ガルシア インド、修道士、40歳
聖フランシスコ・ブランコ スペイン、司祭、28歳
聖フランシスコ・デ・サン・ミゲル スペイン、修道士、53歳
聖マチアス 京郡、年齢不詳
聖レオン烏丸 尾張、パウロ茨木の弟、48歳
聖ボナベントウラ 京都、年齢不詳
聖トマス小崎 伊勢、ミカエル小崎の息子、14歳
聖ヨアキム榊原 大阪、40歳
聖フランシスコ医師 京都、46歳
聖トマス談義者 伊勢、36歳
聖ヨハネ絹屋 京都、織物師、28歳
聖ガブリエル 伊勢、19歳
聖パウロ鈴木 尾張、49歳



１５９７年（慶長２）、豊臣秀吉のキリシタン禁教令のため、京都や大阪などで捕らえられたフランシスコ会の宣教師６名とイエズス会のパウロ三木、二人の同宿者と信者１５人は、京都や伏見、大阪、堺と見せしめのために引き回され、１月１０日長崎に向かった。山陽道を西へ、下関に至るまでに二人の信者が加わり（１月２７日）、２月４日午後大村の彼杵から船で時津に渡った。彼らは５日早朝長崎に向かい、途中浦上のサン・ザラロ病院（現山王神社）で休憩し、西坂に赴いた。２月５日正午、２６人はこの地で処刑された。

１８６２年（文久２）、ローマ法王ピオ九世から２６人の殉教者は聖人に列せられた。１９６２年（昭和37）、「二十六聖人」列聖百年を記念して２６人が一列に並び祈りを捧げる姿が彫られた記念碑と、キリシタン関係の資料が展示されている殉教記念館が建てられ、ガウディー設計の聖家族教会を模した塔２本も隣接して建っている。

### 一口メモ　浦上街道

長崎と時津を結んだ街道で、長崎街道の裏街道にあたる。本街道の日見越えを〝東目通り〟、時津経由は〝西目通り〟と呼ばれていた。朝、長崎の「西坂」をたち時津港で昼食、舟で大村湾を渡り、夕方に彼杵港に着いた。本街道よりも一日、旅程が短縮できた。

## スポット③

### ～被差別部落の二度にわたる移転～

江戸時代長崎の被差別部落は、二度の移転を経験している。長崎に職人町等の「外町」が形成される頃、１６００年代初頭、大音寺・皓台寺の下方にあった「皮屋」（かわた）町は１６４８年（慶安元）、西坂に移転した。キリシタン撲滅のために総仏教徒制を図る幕府は、仏寺の勢力拡大を進め、両寺から出された境内の増地願いを受け、部落を移転し跡地を両寺に与えた。二度目の移転は７０年後の１７１８年（享保３）である。唐津藩主が長崎警備のために西坂を通りかかったところ、番を勤めていた部落民が行列の前に躍り出て、下馬を強いたという。この番人は死罪となるが、これが理由で移転したとされている。ただ、この時代、被差別部落は町外れに居住する事が強制されており、長崎の町が拡充する事によって移転させたと考えるべきであろう。西坂は現在でも傾斜地であり、むしろ移転先の方が生活するのは好条件と思われる。この西坂時代の様子を平松儀右衛門の「旅日記」が次のように伝えている。「一近道なりとて右手の枝道へ這い入り、真っ先に行かばえた町ありて上り下り多しとて坂なしの道へ通ればえた町高く見上る所もあり、皮類たくさん干してありー」とここで皮なめしが行われた事を伝えている。「見上る所」とあるので、現在の西坂小学校あたりと思われる。移転といっても、集落単位の移転であるから、相当時間がかかる。西坂に「えた町」、移転先の馬込に「えた村」と記述されている「長崎絵図」がある。つまり、移転が始まっても、終わるまでに数年を費やしたのである。



## スポット④

### ～日本初の解剖実習の地～

ポンペ・ファン・メールデルフォールトは、オランダの海軍軍医。１８５７年（安政４）長崎における第二次海軍伝習教育派遣隊の一員として来日。松本良順ほか多くの医学生を教え、帰国までの５年間直接教えた者は１３３人を数えた。５年間に診療した患者は１４,５３０人といわれ、１８５９年（安政６）流行したコレラ防疫を行い幕府に建議して洋式病院養生所を設置させた（小島養生所）。

また、ポンペは日本で最初の人体解剖実習を行ったことで有名。「医学は長崎から」には、その様子を次のように伝えている。「解剖学はキュンストリーキという精巧な人体解剖紙模型を用いて行われたが、ポンペはほどなく囚人の人体解剖実習を長崎奉行所に願い出た。牢内の囚人達が反対の騒動を起こした時、良順は解剖実習に献体する事の意義を説き、献体した囚人には処刑後僧による読経を許し手厚く供養すると約束して騒ぎをおさめた。１８５９年９月西坂の丘でポンペは市民の反感のなか身の危険を省みず日本初の人体解剖実習を行った」とある。なお、杉田玄白が著した「蘭学事始」には江戸の骨が原で行った「腑分け」（解剖）は、「えたの虎松」の祖父が行ったとある。ポンペの解剖実習には、「賤夫」が雇われたとされている。

松本良順は、１８５０年（嘉永３）幕命で長崎に来て医学を学び養生所設置に力を注ぎ、江戸に帰ってからは将軍家茂の侍医となり、明治になってからは医学の充実を行い、貴族院議員となった。『松本良順自伝』には、幕末、江戸の長吏頭弾左衛門等の「賤称廃止」を進言したことが記されている。

# 10 中馬込小学校

所在地：場所不詳（長崎市天神町）

1条　中馬込は江戸時代の皮屋であり、平民になってから学問をしようという熱意は他の及ぶところではない。

2条　積立金はなく、月々各家庭から寄付をしてもらい、資金としている。

3条　学校運営の資金を増やす方法はまだ見込みが立たない。

4条　永久的な維持の方法はまだ見込みが立たない。

5条　授業料収入の方法はまだ見込みが立たない。

9条　学校は、洋風のつくりで、大きく広く、他校とは比べものにならない。家屋敷地の価格は4000円（注：米価で6000万円）という。本や機器もそろっている。

10条 生徒総数 111名。
下等1級1人、2級12人、4級12人、5級23人、7級20人、8級43人、日出席43人。（現在の小学1年生63名、2年23名、3年12名、4年13名）

11条　学校に行かなければならない子ども（注:6歳以上）で、学校に来ないものはほとんどいない。学校に来ないものは10分の1程度である。

17条　昼間学校に来られない人で、17歳以上20歳以下の人は、夜に3時間の授業。

18条　夜間学校の生徒50人のうち、出席は平均して30人。

▲「学校監視表」（1877年作成）の「第一中学区学事表」から抜粋・口語訳、 注釈は編集委員。



「学制」発布（1872年）の２年後、山里村、浦上村、時津村、長与村、伊木力村を管轄とする第15大区に８校の学校が設立された。これらの学校は「国民皆学」とはいっても、その建設・維持は地域住民の負担によってまかなわれた。このうち中馬込小学校は、近世の被差別部落を単位に建てられた学校である。被差別部落の人々の解放への思いとエネルギーは、教育に向けられた。これは、他を圧する就学率の高さや学校の施設からもうかがわれる。しかし現実には、この学校を維持し続けることは、大変困難なことでもあった。学校が短期間で廃止（1883年、学区併合）されたことが、このことを示している。中馬込小学校は今日の山里小学校の前身である。

歴史発見

## 中馬込小学校の教員履歴

**長崎県第１５大区浦上村中馬込郷平民**
**岩戸諦造　４９年１０月**
**天保４年５月因州矢嶋鈴造へ入門、同１０年３月まで７ヶ年間習字および漢籍算術稽古、明治７年６月２２日勝山学校講習所へ入学、同７月１１日下等小学五等教員拝命、明治７年１０月２８日下等小学七等助訓拝命、長崎県第１５大区浦上村中馬込郷平民**
**村上儀八　５６年２月**
**文政９年３月１６日より筑前亀井門介藤沢菊太郎へ入門、天保３年３月まで７ヶ年間習字漢籍ならびに算術稽古、　明治７年７月１５日勝山講習所へ入門、同８月２６日下等四等教員拝命、同１０月２８日七等助訓拝命**

当時勝山講習所へ入門するには相応の学問を備えた者でなければならなかった。両人は、文政・天保年間、それぞれ他国の私塾に７か年入門し、学問を身につけていたという。

# 11 聖徳寺

所在地：長崎市銭座町

## 歴史発見

### 皮屋町からの進物

**進物の覚**

**牢屋敷　江戸頡（一足）草履（十足）他**
**同番小頭　江戸頡（一足）他**
**同番役所へ　裏付（十足）**
**御代官所　馬の鼻掛（一つ）上直入裏付（二足）**
**同裏なし（二足）**
**（略）**
**但し極月斗り**
**大光寺　三持華緒（一足）　聖徳寺下裏付（二足）**

これは、皮屋町からの贈り物とその届け出先である。部落の産業であった履物が仕事上関連するところに送られている。大光寺は旦那寺であり、聖徳寺は近隣の寺である。



「聖徳寺」（浄土宗）は１６２６年（寛永３）専誉玄蹟の開基。江戸時代、浦上山里村の馬込郷を除く里郷・中野郷・本原郷・家野郷のいわゆる潜伏キリシタンはすべてこの寺を檀那寺にしていた。１８６５年の「切支丹の復活」（神父プチジャンとの出会い）以降、四つの秘密教会（聖ヨゼフ堂・聖マリヤ堂・フランシスコ・ザベリオ堂・サンタ・クララ堂）が浦上村に造られ、村民はますます信仰を深めていた。１８６７年（慶応３）聖徳寺の許可を得ない「自葬事件」を起こり、浦上村は奉行所による一斉摘発を受け、主だった信徒６８名が捕らえられた。この時、遊撃隊が組織され、役人である町使や警察を務めた部落民、非人が動員された。浦川和三郎の『浦上切支丹史』には、捕縛の模様が聞き書きによるドキュメントとして記録されている。捕らえられた６８名は、桜町の牢に収容され、改宗を迫る拷問を受けた。信仰の自由を侵害する外交問題に発展し、諸外国から抗議された。キリスト教＝邪宗観を受け継ぐ明治政府は、１８６７年（明治元）浦上村村民3,４００名を総流罪とし、名古屋以西１０万石の藩に送った。キリシタンは、これを「旅」と称し、死者６１３人、転宗者1,０１１人の犠牲を払い、１８７３年（明治６）のキリシタン禁制の高札撤去で、帰村した。聖徳寺は、「浦上四番崩れ事件」の舞台となった寺である。

## 一口メモ　「女の一生」

遠藤周作氏の『女の一生　第一部』は、ここ聖徳寺や大浦天主堂などを織り込みながら、長崎の商家へ奉公へ出ていった浦上の農家の娘キクを主人公に、彼女が思いを寄せ津和野へ流されていくキリスト教信者の清吉、いとこのミツを登場させ、幕末から明治の長崎を舞台にして語られている。キリシタン弾圧の嵐が吹き荒れるなか、信仰のために流刑になった若者にひたむきな思いを寄せた娘キクの短くも清らかな一生を描き、キリスト教と日本の風土との関わりを鋭く追及している。（新潮文庫）

## スポット⑤

### ～浦上四番崩れ～

「崩れ」とはキリシタン露見をいうが、島原天草一揆で根絶やしにされたと思われたキリスト教信仰は、その後も「潜伏キリシタン」として、息づいていた。「大村（郡）崩れ」（１６５８年）、１６６０年代の「豊後崩れ」、「濃尾崩れ」ではそれぞれ数百人規模の処刑が行われた。また、１８０５年（文化２）の「天草崩れ」で、５０００人の信仰露見があったが、幕府は「邪宗」ではなく「異宗信仰」として、改心を誓わせ決着を図った。

長崎では四度の「崩れ」が発生している。「一番崩れ」（１７９０年・寛政２）、「二番崩れ」（１８３９年・天保10）があり、この時はいずれも大事には至らず無罪放免となった。「三番崩れ」（１８５６年・安政３）では、異教徒と二人の転び者によって密告があり、15人が捕らえられた。拷問によって牢死した者も多かったが、幕府はこの時も「異宗」として処理した。１８６５年（慶応元）それまで潜伏していたキリシタンが大浦天主堂にいたプチジャン神父に信仰を告白した。１８６７年（慶応３）彼らは死者を弔う際に仏僧拒否事件を起こし、これを機に浦上にあった四つの秘密教会が手入れを受け、男女６８人が桜町の牢に収容された。外交問題に発展するも、表面的な転向によって彼らを釈放。幕府がたおれ、明治政府は、「五榜の掲示」の第三札に　「切支丹宗門は前々のように御禁制」と定め、浦上のキリシタンに改宗を命じた。しかし彼らはこれに応じず、６８年（明治元）５月、大阪において御前会議が開かれ浦上村民総流配が決定した。6月1日、中心人物114人が萩、津和野、福山に送られ、これをはじめとして総数3400人余りが西日本を中心に20藩（22ヶ所）に配流された。これを「浦上四番崩れ」という。１８７３年（明治６）、キリシタン禁制の高札が撤去されるまで、流配地で６００人余りが死亡し、拷問等によって１０００人が転宗、１９００人が最後まで信仰を守った。



## スポット⑥

### ～キリシタンと部落問題～

「キリシタンと部落」というテーマが与えられると必ず思い起こす論文がある。馬原鉄男「未解放部落とキリシタン」である。馬原氏は１９６０年発行の『日本史研究48』にこの論文を掲載し、以降、長崎の部落はあたかもキリシタンの監視を目的に形成されたという理解が広がった。馬原氏は被差別部落がキリシタン集落と密着し、とある民家に立ち寄った際、浦上部落（被差別部落）の話を持ち出してみると、「敬虔なカソリックにしては、余りにも不自然な罵詈雑言の数々をあびせられて、私は愕然とした」とし、『浦上切支丹史』の記述から、長崎の町方にあった部落の浦上移住がキリシタン監視と弾圧の橋頭堡(きょうとうほ)（拠点）であると述べている。たしかに同書には、「庄屋の騒ぎ」の項で、浦上四番崩れ事件の際、部落民が代官所の手先としてキリシタンの逮捕に当たり、その際、両者の間で衝突が起こり、対立の関係が醸し出されたことが記されている。しかしこのことを以て、部落がキリシタンの弾圧と監視を目的につくられたというには、余りにも無理がある。なぜなら、江戸時代初頭、長崎が未だキリシタン王国であった頃、部落の人々もまたキリシタンであったからだ。長崎に潜伏していた宣教師等は、マニラにあった教会本部にさまざまな長崎の事情を書いた手紙を送っている。それを見ると、当時から彼らには、警察の職務も与えられていた。しかし、キリシタンであった部落の人々（「皮屋」と表現）はその職務を拒否し、町の「頭」は牢死しているのである。とすれば、「部落がキリシタン監視を目的に作られた」との理解は間違っていることになる。元々彼らは警察という職務を担っており、長崎の町に胡乱者(うろんもの)（怪しい者）が入ると、現在で云う職務質問みたいなことも行っている。従って、幕末キリシタンの逮捕に当たったのは、その職務の一環なのである。

# 12 浦上青年会館跡

所在地：長崎市緑町

歴史発見

## 部落改善運動

長崎市の西北隅琴平山の麓に浦上町と称する部域あり。戸数２２５、人口１０３６、住民多くは皮革業を営む。かつては細民部落として一般より擯斥せられたりしが、明治２８、２９年（1895～96）の頃、部域の先覚者岩見常次郎、率先蹶起して改善の烽火を挙げ、次いで梅本仁四郎、高松恒作の二青年、之が援助者となり、青年団を中心として、物心両面より鋭意策励を加えしかば、近く十数年来、著るしく改善の域に進み、各方面の状態殆ど一般と軽輊（ケンチ）なく、民度亦大に高まり、近街近邑とも克く親和し、今や殆ど部落の俤を呈せざるに至れり。其の道路に総て敷石を為したるが如き宏荘なる青年会館を建てたるが如き、教育振興して、中等教育を受けたる男女三十余人を算するが如き、何れも他部落に比儔（ヒチュウ）を見ざる所たり。（中略）本青年団の創立当時は会員僅かに３４人に過ぎざりしも、今や其数数百名を算し、又一面には少年会を組織し其会員１８０名あり。別に婦人会の組織もありて、会員１７０名あり。其他青年会の上海支部会員５０余名、浦塩支部会員３０余名あり。又此外に法友会なるもの、其会員６０名あり。

内務省社会局「部落改善を目的とする団体の概要」から引用



江戸時代、皮屋町といった被差別部落は、明治となり、浦上山里村馬込郷の一地域（中馬込）となった。その後長崎市に編入され、１９１３年（大正２）浦上町となる。写真は、親鸞聖人の立像や山下三郎氏の胸像、梅本仁四郎氏の顕彰碑。梅本氏は部落改善運動に尽力された功績として、戦後作られた郷土親興会の手によって立てられた。

１９０１年（明治34）、真宗青年教会が組織された。これは明治30年頃頃より岩見常次郎を中心として進められてきた運動の成果である。真宗を精神的支柱とし、「会員に労働の神聖なるを説き、実践躬行（キュウコウ）（自分から実行すること）を教え」た。そして「職業・学業の余暇、此地方社寺の祭礼に際し、種々の行商を為さしめ、其之に依りて得たる零砕の益金を蓄積すること８年間、１９０９年（明治42）に至り、其額１７００円に達したるを以て」、また町内有志の醵（ボ）金を加え、「外部は洋風とし、内部には畳を敷き詰め」た会館が建設された。

この会館を拠点に日常活動としては、文庫部、運動部、音楽部、実業部、人事部（職業紹介、諸願届の事項、家庭に関する事項）、衛生部等の活動があった。また、少年日曜学校も設置された。これらの運動は、部落改善運動（融和運動）に結実していくものであるが、その後の部落での階層分化の広がりとともに、内部に対立も生み出していった。

この青年会館で、１９２８年（昭和３）６月、長崎県水平社が結成された。

「全国水平社長崎支部」とあり、写真中央が松本治一郎である。（松本家蔵）

# 13 涙痕の碑

所在地：長崎市緑町

ここは旧浦上町の共同墓地。毎年８月９日に旧浦上町出身者で組織された「郷土親興会」によって、追悼法要が行われている。中央にあるのが「原爆犠牲者之慰霊塔」。裏面には「昭和２０年８月９日原子爆弾による四百余名の犠牲者並びに戦争犠牲者の霊よ安らかに眠れ 浦上町」と刻まれている。隣には「涙痕の碑」が被爆３０周年に造られた。

浦上町には、被爆当時１０３４名のうち、兵役従事者を除くと９０９人が住んでいた。そのうち、１５５人が即死、１４０名が同年中に亡くなっている。調査時点の１９７０年まで戻ると４３６人が死亡、２９３人が生死不明となっている。

被爆後の浦上町の人々は、知人や親戚を頼って全国に散らばっていった。２２０所帯のうち、浦上町に残った人は２１所帯、市内に８８所帯、県内に１８所帯、福岡に１８所帯、大阪に４９所帯と『長崎原爆戦災誌』に記録されている。

１９４９年（昭和24）に長崎国際文化都市建設法ができ、浦上町を縦断する道路が建設された。まさに部落を消し去ろうとするかのような工事だった。１９６４年（昭和３９）に「浦上町」は消滅し、３町に分割された。

唯一残ったのがこの共同墓地だった。長崎県内のみならず全国へ散っていった浦上部落の人々にとっては心のより所となった。

## 歴史発見

### 「艦船売込組合」の銘

浦上町の共同墓地には「艦船売込組合」の銘の墓石がある。これは１８９９年（明治３２）にたてられた墓である。この墓石の銘に関係のある記事が１８８５年（明治２８）４月１６日の「鎮西日報」に掲載されている。

> 今般、内外国艦船へ靴売り込み営業に付き当市内および浦上山里村　同業五拾余名に於いて規約を締結し、組合を設け、岩戸常五郎を正取締人に撰人し組合一般の取締をなし、売品に注意を加へ、業務上不都合これなきよう精々勉励つかまつり候あいだ、お引き立ての程ひとえに仰ぎ願い奉り候なり　拝告
>
> 長崎港艦船靴売込業組合事務所

１９１４年、第一次世界戦争が勃発すると、靴製造業は数年にわたって隆盛の一途をたどっている。『東洋日の出新聞』には「軍隊用靴・４万足注文」「軍用靴大製造・靴工の浦塩渡航」、「長靴２０万足・露国より大注文・長崎にて引き請けたり」等の見出しで、靴製造業の繁盛ぶりが伝えられている。

## 一口メモ　今は昔「同対審」答申の頃

1960年（昭和35）、国に同和対策審議会が設置され、1963年からは全国調査が始まり、翌年、長崎県は第１回の調査報告を総理府に送った。「県内の同和地区10地区 120戸」。しかし、長崎市など多数の地区が含まれていなかった。1971年6月の報告では、ついに「該当なし」とした。ことの重要性を感じた総理府から1972年4月、「重要につき再調査を」の依頼がきた。しかし、長崎市は「本市は戦前において部落形成が見られた地区があったようであるが、道路交通網の発達、地域開発による一般市民の住宅伸展により現在はまとまった部落形成はない。」と回答し、再び「該当なし」の長崎県報告が総理府に届いた。

## ●主要参考文献一覧


布袋厚『復元！江戸時代の長崎』（長崎文献社、2009年）

阿南重幸『被差別民の長崎・学』（長崎人権研究所、2009年）

『長崎県大百科事典』（長崎新聞社、1984年）

『論集長崎の部落史』（長崎県部落史研究所、1992年）

『長崎港草』（長崎文献叢書、1973年）

高木慶子『高木仙右衛門覚書の研究』（中央出版社、1993年）

磯本恒信『長崎の風土と被差別部落史祖考』
（長崎県部落史研究所、1980年）

『長崎原爆戦災誌』（長崎市役所、1979年）　他



NPO法人　長崎人権研究所

〒850-0048　長崎市上銭座町２番７号

TEL 095-(847)8690　Fax 095-(847)8696

E-mail　anan@sings.jp

http://homepage3.nifty.com/naga-humanrights/




# 時間を歩く